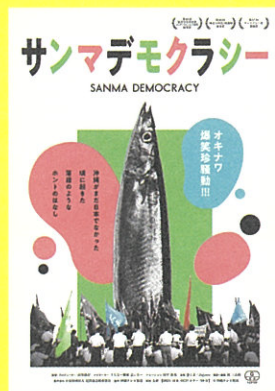


沖縄本土復帰

50年特集

2022年 6/17 (金) - 6/30 (木)



復帰 50 年の沖縄から考える ——

祖国復帰を願っていた 60 年代、統治者アメリカを追い詰めたひとりのおばあから始まった民主主義を巡る闘い / 72 年、対米交渉・対沖縄折衝の両面で大きな役割を担っていた知られざる外交官の存在 / そして現代——、北国に住んでいた一人の少女がみた、沖縄の素顔…。映画から今を見つめる。



返還交渉人 いつか、沖縄を取り戻す

ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記

サンマデモクラシー

沖縄返還に東奔西走した

外務官僚の活躍・苦悩が、今、初めて蘇る！
2010 年の外務省の“密約問題”調査により、72 年の沖縄返還当時の外交資料がほぼ全て公開された。資料を読み解くと、対米交渉・対沖縄折衝の両面で 1 人の外交官が大きな役割を担ってきた事が初めて判った。その男の名は、千葉一夫。「鬼の千葉なくして沖縄返還なし」と称された伝説の外交官である。アメリカ政府の理不尽な要求に“怒り”を隠さず、対等に交渉し、米軍基地の存続に困惑する沖縄の状況に“泣き”、そして寄り添った。そんな人間・千葉一夫の存在を非公開資料や遺族への丹念な取材から掘り起こした宮川徹志の『僕は沖縄を取り戻したい 異色の外交官・千葉一夫』(岩波書店刊)を原案に、昭和史のハイライトの一つ、沖縄返還交渉の舞台裏を初めて描く、“社会派エンターテインメント映画”が誕生した。

監督=柳川 強
©NHK

沖縄の言葉、ウチナーグチには「悲しい」という言葉はない。それに近い言葉は「肝(ちむ)ぐりさ」。誰かの心の痛みを自分の悲しみとして一緒に胸を痛めること。それがウチナーンチュの心、ちむぐりさ。そんな沖縄に、ひとりの少女がやってきた。能登半島で生まれ育った、坂本菜の花さん、15 歳。彼女が通うのは、フリースクール・珊瑚舎スコール。既存の教育の枠に捉われない個性的な教育と、お年寄りも共に学ぶユニークな学校で 70 年あまり前の戦争で学校に通えなかったお年寄りとの交流を通して彼女は、沖縄ではいまなお戦争が続いていることを肌で感じとっていく。次々に起こる基地から派生する事件や事故。それとは対照的に流れる学校での穏やかな時間。こうした日々を彼女は故郷の新聞コラム「菜の花の沖縄日記」(北陸中日新聞)に書き続けた。「おじい なぜ明るい?」。疑問から始まった日記は、菜の花さんが自分の目で見て感じることを大切に、自分にできることは何かを考え続けた旅物語だった。少女がみた沖縄の素顔とは——。

監督=平良 いずみ
©沖縄テレビ

沖縄史に埋もれた伝説のサンマ裁判を描き出すノンストップドキュメンタリー

1963 年沖縄。祖国復帰を願う沖縄の人々が、日本の味として食べていたサンマ。サンマには輸入関税がかけられていたが、その根拠は琉球列島米国民政府の高等弁務官布令、物品税法を定めた高等弁務官布令十七号(1958 年公布)。だが、関税がかかると指定された魚の項目に、サンマの文字はなかった。そこで「関税がかかっているのはおかしい!」と、魚卸業の女将・玉城ウシが、琉球政府を相手に徴収された税金の還付訴訟を起こした。求めた額は、現代の貨幣換算でなんと 7000 万円。このウシおばあが起こした“サンマ裁判”は、いっしょに統治者アメリカを追い詰める、民主主義を巡る闘いとなった。統治者アメリカと自治権をかけて闘った人々の姿を伝える。

監督・プロデューサー=山里 孫存
©沖縄テレビ

Schedule

N= 返還交渉人 C= ちむぐりさ S= サンマデモクラシー

S	M	T	W	T	F	S
12	13	14	15	16	17 13:00- C 15:30- N	18 13:00- S 15:30- C
19 13:00- C 15:40- S	20 休映	21 13:00- N 15:30- C	22 13:00- C 15:30- S	23 13:00- S 15:30- N	24 13:00- N 15:30- S	25 休映
26 13:00- S 15:30- C	27 休映	28 13:00- S 15:30- N	29 13:00- C 15:30- S	30 13:00- N 15:30- C		

Event

《沖縄慰霊の日》6.23(※) 15:30 の回上映後、柳川強監督による舞台挨拶

6.17(金)より2週間特集上映!

(料金) 一般 1,500 円 シニア 1,200 円 学生(大学・専門学校)、高校生以上 1,200 円
中学生以下(3歳以上) 1,200 円 障害者手帳をお持ちの方(介護者2名まで) 1,200 円

JR 恵比寿駅東口改札より徒歩7分、地下鉄日比谷線
恵比寿駅より徒歩10分 恵比寿ガーデンプレイス内

東京都写真美術館ホール

03-3280-0099 (代表) www.topmuseum.jp

